

アクティブラーニング型授業の実践と評価

—二つの授業をもとに—

アクティブラーニング効果検証会

萩原麻琴, 三宅翔馬, 楊見陽, 劉斯琨, 李璐, 和田真理絵

本研究では、2つのアクティブラーニング型授業を実践し、評価することでアクティブラーニング型授業の効果を検討することを目的とした。アクティブラーニングの手法を取り入れた授業を開発し、教育学部生を対象にその実践と評価を行った。授業評価アンケートやインタビュー調査、ワークシートの分析の結果、どちらの授業でも、話し合いを通して話し合い前に持っていた知識や意見がより発展的なかたちで学習者に定着したことが示唆された。また、話し合いの活発さは、グループワークで取り扱う内容とグループメンバーによって左右されることも示唆された。今後は、調査対象を広げ、さらなる授業の実践と評価を行う必要がある。

Keywords : アクティブラーニング, アクティブラーニング型授業, ケースメソッド, グループディスカッション

1. 研究の背景と目的

近年、学習者主体の学習手法であるアクティブラーニングが注目を集めている。平成29年度に告示された新しい学習指導要領においても学習の質や深まりが重視され、「どのように学ぶか」という観点において主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善として、アクティブラーニングの手法を指導に取り入れることが明記されている。アクティブラーニングとは、学生にある物事を行わせ、行っている物事について考えさせることである。特徴として、学習者が授業を聴く以上の関わりをしていることや情報の伝達より学習者のスキルの育成に重きが置かれていること、学習者が高次の思考に関わり、活動に関与していることなどが挙げられる。

アクティブラーニングという名称は教授・学習法の総称であり、具体的な手法としては反転授業やケースメソッド、ジグソー法、グループディスカッション、グループワークなどが該当する。

このように、アクティブラーニングの多くの手法が開発され、アクティブラーニング型授業として実施されている。一方で、学習者に与える学習効果や、学習者がアクティブラーニングで得られる学習成果については現在も議論がなされている段階である(杉山・辻, 2014)。

そこで本研究では、2つのアクティブラーニング型授業を実践し、評価することでアクティブラーニング型授業の効果を検討することを目的とした。ま

ず、学習活動としてアクティブラーニングの手法を取り入れた二つの授業を開発し、授業実践を行なった。そして、受講した学生から得た評価をもとに、アクティブラーニング型授業の効果を検討した。

2. 研究方法

アクティブラーニング手法のうち、ケースメソッドを取り入れた授業(AEDとジェンダー)と、グループディスカッションを取り入れた授業(中国の入試制度)を開発し、教育学部生を対象に実際に授業を行った。

2.1 実施授業の概要

授業開発を行う各院生の修士論文のテーマやこれまでの経験に基づき、二つの授業を開発した。

(1) AEDとジェンダー

- ・実施日時 2019年11月28日 7, 8限
- ・対象学生 養護教諭養成課程に在籍する3年生(女子28名)

本授業は、心停止を起こした傷病者に対してAEDを使用する際に、傷病者の身体のプライバシー保護に向けた配慮の必要性と具体的な手立てについて学習する機会を設けることを目的とした。授業内容は一次救命処置の必要性、AED使用に戸惑う心理的背景、傷病者のプライバシー保護の必要性、の三つの内容で構成した。授業では、動画を用いながら一次救命処置の必要性について講義を行った。また、ケー

スを用いて実際の場면을想像しながら話し合いをさせることで、意見交換を通して複数の手立てを考案および検討し、学生間で共有できるようにした。

(2) 中国の入試制度

- ・実施日時 2019年12月17日 3, 4限
- ・対象学生 学校教育教員養成課程に在籍する2年生 (男子11名, 女子12名, 計23名)

本授業は、中国の大学入試制度—高考を学ぶことをきっかけに日本人学生に異なる国—中国における受験生のことを理解し、入試制度の公平性について批判的に考える場を提供することを目的とした。

授業内容は、「高考」の基本情報及び中国で高考に対する批判、中国の受験生の姿、「高考」における公平的に人材を選択するための改革という三つの部分で構成した。授業では、図表により「高考」の問題点に関する推測、ビデオにより中国で「高考工場」と呼ばれる学校の存在に関する議論、弱い地位にいる受験生を優待すべきかどうかに関する意思決定という三つのグループワークを行った (図1参照)。



図1 グループディスカッションの様子

2. 2 分析方法

(1) AEDとジェンダー

同一内容の自由記述式の質問を、授業前と授業後に行った。質問は「AEDの使用について、あなたが養護教諭の立場で指導する際、どういった点に気をつけて指導しますか?」といった内容である。自由記述データは、テキストマイニングを用いて分析した。テキスト・マイニングツールはKHcoder (樋口, 2014) を用い、頻度解析を行なった。後日、授業前後で自由記述式の質問に対する記述内容に変化が見られた学生の中から6人を選び、1人あたり10分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューでは、本授業の感想やケースの内容に関する事、記述内容

の変化の理由、グループワーク中の話し合いの活発さなどについて尋ねた。

(2) 中国の入試制度

授業評価アンケートにMoodleを用いた。質問項目は「今日の授業の満足度を教えてください」など5項目を5件法, 1項目を自由記述とする全6項目であった (表1)。

表1 授業評価アンケート項目

Q1.今日の授業の満足度を教えてください
Q2.今日の授業の取り組みを自己評価してください
Q3.今日のグループワークでは、話し合いを活発に行うことができましたか
Q4.中国の入試制度について理解することができましたか
Q5.話し合いを通して、自分の意見は変わりましたか
Q6.問5の選択肢を選んだ理由を教えてください (自由記述)

また同一内容の自由記述式の質問を授業前と授業後に行った。質問は「弱い立場にいる受験生を優待することに賛成/反対」といった内容である。賛成を5, 反対を1とし、当てはまる数値を選択した。またその理由を自由記述で問うものとした。これをワーク3前後の2回実施し、回答の変化を観察した。

3 結果と考察

(1) AEDとジェンダー

・自由記述式質問の結果

頻度解析によって単語の出現頻度を算出した。出現頻度上位10単語を出現回数順に示す。

【授業前】

AED(29), 使用(21), 指導(9), 場所(9), ショック(8), 伝える(8), 傷病者(7), 電気(7), 安全(6), 確認(6)

【授業後】

伝える(15), 配慮(14), AED(10), プライバシー(10), 技術(10), 知識(10), 周囲(8), 使用(7), 指導(7), 人(7)

授業後には「配慮」「プライバシー」の出現頻度が増加していることがわかる。また、自由記述の文章をみても、授業前にはAED使用におけるマニュアルに沿った基本的な注意事項の記述が多く見られた。その反面、授業後には、AED使用における基本的な注意事項に加え、AED使用の対象者とその場の具体的な状況を踏まえた記述に変化していた。また、傷病者への配慮を見据えた救命行為を行うことの記述も多くみられた。

・インタビュー結果

「AEDとジェンダー」のインタビュー結果をまとめたものを、表2に示す。ケースを用いて良かった

表2 インタビュー結果まとめ

質問	回答結果
ケースを用いて良かった点	・事例があることで具体的に状況を想像することができた。(4件) ・被救助者が女性、救助者が男性である想定をしたことがなかったため、新しい気づきがあった。(2件)
ケースについて改善してほしい点	・動画の内容とケースの内容の差別化が難しく、混乱した。(3件) ・ケースの内容から得られる情報が限られていた。(1件)
記述内容の変化の理由	・実際にケースなどを考えてみんなで勉強していくことで、新しい知識を得ることができたため。(2件) ・AEDの使い方を感じる授業は経験してきたが、傷病者のプライバシーに配慮する必要があることがこの授業でわかったから(3件)
話し合いの活発さについて	・活発に話し合いを行うことができた。(5件) ・活発に行うことができた。プライバシーの配慮が必要なことがわかった上に、それだけではなく、他の場合(場面)であったらどのようにプライバシーを配慮する必要があるかまで考えることができた。(1件)
プライバシーに関する話題について話し合うこと	・知り合い同士であったため、今回は抵抗なく話し合えた。(6件) ・グループが異性であったり、知らない集団であると、抵抗感はある。話しにくいと思う(6件)

点について、「ケースを用いることによって実際の状況を具体的に想定した話し合いを行うことができた」といった回答が得られた。その反面、「授業で扱った動画の内容とケースの内容の差別化が難しく混乱してしまった」という学生の意見もみられた。また、自由記述式質問の記述内容の変化の理由について尋ねたところ、「実際にケースなどを考えてみんなで勉強していくことで新しい知識を得ることができたため」や、「授業を通して傷病者のプライバシーに配慮する必要があることがわかったから。」といった回答であった。話し合いの活発さについてはどの回答者も「活発に話し合いを行うことができた。」と回答していたが、その理由は「知り合い同士であったため抵抗なく話し合うことができた。」といったものであった。「グループのメンバーが異性または、知らない集団であると抵抗感はある。話しにくいと思う。」といった回答が、6人全員から得られた。

・成果と今後の課題

本授業では、ケースメソッドを取り入れた授業実践を通して、AEDの使用について指導する際、救助者や被傷病者の立場を考えることで傷病者のプライバシーに配慮する視点を育むことを目的とした。

授業前後の自由記述式回答の結果から、授業を通してプライバシーに配慮する視点を育むことができたと考えられる。高木(1997)では、ケースメソッドの教育効果に、「現実とかけ離れた教材から概念だけを学習させる場合より、状況を評価したり、概念を応用する技能を育成する。」ことや「ケースメソッドによって学習する学生は、既成概念の応用と同時に、新しい概念を展開する方法をも身につけることができる」ことなどを挙げている。インタビュー

結果からも、ケースを用いて学習者同士で話し合うことで、AEDの使用における知識や技術といった既成概念に加え、傷病者のプライバシーの配慮といった新しい概念を展開できたことがうかがえる。

本授業では、どの学生も話し合いを活発に行うことができたという回答であったが、話し合いを活発に行えた理由に、グループメンバーの特徴が挙げられる。本授業の受講生は、全員同性であり、知り合い同士であった。そのため、プライバシーに関わる内容の話し合いでも抵抗なく話し合えていた。インタビュー結果からも、「グループに異性や知らない人がいたら、話しにくかったかもしれない」との回答が6人全員から得られたことから、話し合いの活発さには、ワークの内容とグループメンバーによって左右される可能性があることが示唆された。今後「AEDとジェンダー」授業を実施するにあたって、受講生の特徴に合わせたケースの内容や授業デザインを開発することが課題としてあげられる。また、授業で使用した動画の内容も、ケースの内容と差別化できるよう検討していく必要がある。

(2) 中国の入試制度

・授業評価アンケートの結果

授業評価アンケートの結果を表3に示す。アンケート結果の記述統計を算出したところ「満足度」、「取り組み」、「話し合い活発度」、「内容理解」の平均値は4.00点を超えていた。「意見の変化」の平均値は3.13点であった。

問6への回答としては、「自分と似た意見を持った人が多かったので意見が変化しなかった。」という記述が複数見られた。一方で「話し合いを通して、いろんな人の意見もきくことができたので、より考

えの視野が広がった。」，「個人で考えるだけでは生まれなかった発想がグループワークで意見を共有することによって生まれたため，効果的であった。」という記述も見られた。

表3 授業評価アンケート 結果

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	度数
満足度	4.30	0.70	3	5	23
取り組み	4.48	0.67	3	5	23
話し合い活発度	4.65	0.57	3	5	23
内容理解	4.26	0.69	3	5	23
意見の変化	3.13	0.11	1	5	23

・ワークシートの記述

ワーク3の前後で得点の平均に変化は見られなかった。自由記述の回答では，ワーク前は「弱い立場にいる受験生を優待すべきである／全員が同じスタートラインに立てるような支援が必要である／点数操作による支援はすべきでない」といった記述が多く見られた。ワーク後は上記の意見に加え，「学習環境を整える支援が必要／受験内容を変えるべき／学歴頼りにならないよう就職口を増やすべき／他の受験生が不利になってしまうなら優待には反対」といった記述が見られた。

・成果と今後の課題

本授業では，留学生による中国の大学入試制度「高考」を学ぶことをきっかけに，日本人学生に異文化圏の国における受験生のことを理解し，入試制度の公平性について批判的に考える場を提供することを目的とした。授業評価アンケートの結果から，授業にしっかり取り組めた，話し合いを活発に行えたと感じている学生が多く，結果的に高い満足度を得られた授業であったと言える。本授業の学習者である教育学部2年生はこれまでに反転授業の経験がありアクティブラーニング型授業に慣れていたということも「満足度」，「取り組み」，「話し合い活発度」の平均値の高さに関係していた可能性がある。

「内容理解」の平均値が高かった要因の一つには日本人学生へ向けたイラストや動画などを使用し視覚的なわかりやすさを重視した，授業デザインの配慮が考えられる。ワーク3は実際に挙げられている「弱い地位にいる受験生を優待する」という改革策について，その是非を議論するものであった。

ワークシートの記述の比較からは，グループワークでの議論によってワーク前の意見に「学習環境の整備」といった新たな視点が加わったことが示唆された。

本授業の学習者は教育学部内において開講されている専門科目の授業履修者であり，非常に限定的な範囲に留まっていた。本授業の評価をより適切に行

うため，今後は多様な学習者を対象として授業実践を行っていく必要がある。また本授業における「内容理解」の度合いの検討は学生による自己評価のみであった。アクティブラーニング型授業の効果をより深く検討するため，今後はルーブリックなどの方法を取り入れ授業内容の理解を客観的に評価していくことが必要である。

4. 総合考察

本プロジェクトの目的は，2つのアクティブラーニング型授業を実践し，評価することで，アクティブラーニング型授業の効果と課題を検討することであった。

どちらの授業でも，他の学習者との話し合いを通して話し合い前に持っていた知識や意見がより発展的なかたちで学習者に定着したことが示唆された。このことは，アクティブラーニング型授業の効果のひとつと言える。

一方で，グループワークを行うにあたり，話し合いの活発さは，グループワークで取り扱う内容とグループメンバーによって左右されることも示唆された。本プロジェクトでは，どちらの授業も対象となる学生が知り合い同士であったため，活発に話し合いが進み，アクティブラーニング型授業による成果が得られた可能性がある。今後は，調査対象を広げ，授業の実践と評価を行っていく必要がある。

引用・参考文献

- 樋口耕一(2014). 社会調査のための軽量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して- ナカニシヤ出版
- Louis, B, Bames. , C, Roland, Christensen. Abby, J, Hansen (1997). ケースメソッド実践原理-ディスカッション・リーダーシップの本質-(高木春夫, 訳) 日本: ダイヤモンド社
- 文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理: アクティブ・ラーニングに関する議論」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/_icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_4.pdf (2020/1/18閲覧)
- 杉山成・辻義人(2014). アクティブラーニングの学習効果に関する検証: グループワーク中心クラスと講義中心クラスの比較による, 小樽商科大学人文研究, 127, 61-74